

論文のタイプ	原著
Author	Martin TR, Bracken MB.
Title	Association of low birth weight with passive smoke exposure in pregnancy.
和訳タイトル	妊娠中の受動喫煙と出産時低体重の関連。
Journal	Am J Epidemiol
巻	124
号	4
ページ	633-42
年	1986
キーワード	Pregnancy, passive smoke, birth weight 妊娠、受動喫煙、出生時体重
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/6
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	5
抄録	<p>1980～1982年のエール-ニューヘーヴン病院の3,891例の出産前患者の前向き研究において、4分の1(23.6%)は妊娠中にタバコを吸わなくて、1日少なくとも2時間副流煙にさらされた。これら非喫煙妊婦の間で、受動的な煙暴露は、出産時低体重(2,500g未満)新生児を分娩と有意に関連があった。受動喫煙しない女性と比較して、受動喫煙者からの出産時低体重児の相対危険度は、2.17であり、平均して24g小さい乳児を出産した。喫煙者に対する受動喫煙の相加的効果はなかった。直接のタバコ喫煙による出産時低体重のリスクは、3.54(95%のCI = 1.62-7.71)であった。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Upton MN, Smith GD, McConnachie A
Title	Maternal and personal cigarette smoking synergize to increase airflow limitation in adults.
和訳タイトル	母性喫煙と本人の喫煙が、成人期の気道閉塞を相乗的に悪化させる。
Journal	Am J Respir Crit Care Med.
巻	169
号	4
ページ	479-87
年	2004
キーワード	airflow limitation, Maternal cigarette smoking, smoking 気流制限、母親喫煙、喫煙
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/15
重要度 (アカデミック)	5
重要度 (啓蒙的)	5
抄録	母性喫煙が慢性閉塞性肺疾患 (COPD) リスクを増すかどうかは、わかっていない。本論文では、母性喫煙と本人の喫煙が相乗的に気流制限を悪化させているか検討した。母性喫煙量は、個人の喫煙にかかわらず FVC と FEV1 と逆相関した。母性喫煙は、現喫煙者において FEV(1)/FVC と最大呼気中間流量 (FEF25-75) 、 FEF (25-75)/FVC と残余 1 秒量 (FEV1:対象者の 1 秒量—予測 1 秒量) の悪化と相関が認められた。これは、非喫煙者や元喫煙者では見られなかった。共変量解析では、1 日 10 本の母性喫煙は、COPD を 1.7 倍に増加させることがわかった母性喫煙は個人喫煙にかかわらず肺気量をそこなって、個人喫煙と相乗的に気流制限と COPD を増加させる。

論文のタイプ	原著
Author	Stern DA, Morgan WJ, Wright AL,
Title	Poor airway function in early infancy and lung function by age 22 years: a non-selective longitudinal cohort study.
和訳タイトル	乳児期の弱い肺機能と 22 歳での肺機能：非選択的の長期的コホート研究。
Journal	Lancet.
巻	370
号	9589
ページ	753-64
年	2007
キーワード	airway function, early infancy, early adulthood、cohort study. COPD 肺機能、乳幼児期、成人早期、コホート研究、慢性閉塞性肺疾患
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/15
重要度 (アカデミック)	5
重要度 (啓蒙的)	5
抄録	成人若年期の肺機能は、慢性閉塞性肺疾患の最も強い予測因子の 1 つである。本論文は、成人期の初めに肺機能が、出生の直後の肺機能に影響を受けるかについて調査した。1980～1984 年にかけて、出生時に非選択的に 169 人の乳児は、平均 2.3 ヶ月の時に、胸部圧縮技術によって最大呼気速度を計量した。さらに、年齢 11、16 と 22 歳の時に少なくとも一回、これらの参加者のうちの 123 人に、肺機能の測定を得た。測定は、1 秒量、努力肺活量、最大呼気中間流量を気管支拡張剤吸入前後で測定した。結果、最大呼気速度の低値であった四分の一の集団は、成人若年期の肺機能で FEV1/FVC 比率、最大呼気中間流量と一秒量において低値であった。結論は、出生の直後の弱い気道機能は、若年成人における気流閉塞の危険因子と認められなければならない。従って慢性閉塞性肺疾患の予防は、胎児期から始める必要があるかもしれない。

論文のタイプ	原著
Author	Canoy D, Pekkanen J, Elliott P
Title	Early growth and adult respiratory function in men and women followed from the fetal period to adulthood.
和訳タイトル	男女の胎児期から成人期までの追跡調査による出生時の成長と成人期呼吸機能との関係。
Journal	Thorax
巻	62
号	5
ページ	396-402
年	2007
キーワード	respiratory function, fetal period, birth weight 肺機能、胎児期、出生時体重、
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/15
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>いくつかの研究で、出生時低体重を指標とした胎児の低い成長が小児期の低い呼吸機能と関係していることを示唆しているが、成人期の肺機能との関係は明らかでない。本論文は、胎児期の成長と成人期の呼吸機能の間の関係を検討した。臨月で生まれた 5390 人の男性と女性について、胎児期から成人期までの長期コホートスタディを行った。出生時体重と幼少期は記録された、そして、31 歳のとき 1 秒量と努力性肺活量が、測定された。結果、男女とも一秒量、努力肺活量とも出生時体重と線形に相関した。出生時体重が 500g 増えるごとに、1 秒量は 53.1ml ずつ、努力肺活量は 52.5ml ずつ増えた。結論、出生時体重は、成人呼吸機能と独立に関連している。人生初期の成長が、正常な肺の発達を制限する可能性があることが示唆された。</p>

論文のタイプ	その他
Author	CDC
Title	Smoking-Attributable Mortality, Years of Potential Life Lost, and Productivity Losses---United States, 2000-2004
和訳タイトル	米国における 2000-2004 の間の喫煙起因性の死亡率、潜在的な人生の喪失年数、生産性損失-
Journal	Morbidity and Mortality Weekly Reports (MMWRs)
巻	57
号	45
ページ	1226-1228
年	2009
キーワード	Mortality, United States, Smoking-Attributable
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/5
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>2000年から2004年の米国における喫煙の与える悪影響についての報告。年間喫煙により年間443,000人が死亡し、約510万の潜在的寿命の損失、968億ドルの生産性損失があった、その中で、受動喫煙に関する記述は以下のごとくである。、母性喫煙により776人の乳児が死亡した。毎年、受動喫煙により肺癌と心疾患で、およそ49,400人が死亡している。喫煙による火災から年間736人がなくなっている。</p>

論文のタイプ	総説
Author	Chan-Yeung M, Dimich-Ward H.
Title	Respiratory health effects of exposure to environmental tobacco smoke.
和訳タイトル	受動喫煙による呼吸器系健康状態への影響。
Journal	Respirology
巻	8
号	2
ページ	131-9
年	2003
キーワード	environmental tobacco smoke., Respiratory health effects in utero 受動喫煙、呼吸器の健康への影響、子宮内
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/5
重要度 (アカデミック)	4
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>タバコの煙は、屋内空気汚染の主要構成要素であり、受動喫煙 (ETS) は、非喫煙者に対する健康障害因子として、世界的に認められている。ETS は、主流タバコの煙と同じ毒性物質を含む。コチニン (ニコチンの代謝産物) は、ETS にさらされる非喫煙者の尿と血清で測定され、暴露の程度を反映する。小児において、ETS は、肺機能を低下させ、下気道疾患のリスク増加し、入院の必要な喘息の急性増悪を引き起こし、非アレルギー性気管支過敏性の有病率を増加させ、乳児突然死症候群のリスクも増加させる。ETS は、家族に経済的に余分な負担をかけ、医療サービスを必要とさせる。</p> <p>成人において、ETS は、特に高濃度暴露は、肺癌のリスク増加と関係している。ヘルスケアを提供する人は、非喫煙者の権利をコミュニティで擁護すべきであり、煙草への暴露を制限するための立法処置をサポートすべきである。</p>

論文のタイプ	総説
Author	Kurmi OP, Ayres JG.
Title	The non-occupational environment and the lung: opportunities for intervention.
和訳タイトル	非職業性環境と肺：予防の可能性
Journal	Chron Respir Dis.
巻	4
号	4
ページ	227-36
年	2007
キーワード	Environment, lung , intervention , non-occupational 環境、肺、予防、非職業性
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/5
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>屋内や屋外の環境要因は、呼吸器疾患を生じさせるか悪化させることがある。例えば受動喫煙（ETS）と屋外の大気汚染などは、環境への介入が健康を増進することができる。個人に対する ETS のアドバイスは、有益である。受動喫煙の影響は、小児では喘息の発症と呼吸器症状を増悪させるが、成人の場合あまり注目されていない。成人では、長期間の受動喫煙は、肺がんのリスクを 20% 増加させる。また、家庭での受動喫煙は、COPD 患者の健康を損なうという報告が最近ある。これらの結果から、スコットランドでは、パブやバーで 86% 受動喫煙がへり、そのため短期的に非喫煙者でも、肺機能や症状の改善がみられた。</p>

論文のタイプ	総説
Author	Reardon JZ.
Title	Environmental tobacco smoke: respiratory and other health effects.
和訳タイトル	受動喫煙：呼吸器およびその他の健康
Journal	Clin Chest Med.
巻	28
号	3
ページ	559-73
年	2007
キーワード	Environmental tobacco smoke, health effects. 受動喫煙、健康への影響、
読んだ人	土橋邦生
読んだ期日	2009/03/5
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	4
抄録	<p>1986年の公衆衛生局長官の報告で、受動喫煙の有害性が指摘されて以来多くのデータが蓄積され、2006年公衆衛生局長官の報告では、受動喫煙の有害性に対する議論は終わったと宣言した。本論文は、受動喫煙は、COPDを含め喘息、上下気道感染症、循環器疾患など多くの疾病に対する有害性を解説した総論である。母性喫煙は生まれた子供の喘息発症リスクを上げたり、肺機能を低下させる。COPD患者の4分の1は非喫煙者であり、成人においても長期の受動喫煙は、COPDの重症度とQOLの低下と関連があるという報告もされている。いずれにしろ受動喫煙は、COPDの発症リスクを高める。</p>

論文のタイプ	総説
Author	Ambrose JA, Barua RS.
Title	The pathophysiology of cigarette smoking and cardiovascular disease
和訳タイトル	喫煙の病態生理と心血管疾患
Journal	J Am Coll Cardiol
巻	43
号	10
ページ	1731-1737
年	2004
キーワード	動脈硬化、血栓、血管不全、酸化ストレス Atherosclerosis, thrombosis, vascular dysfunction, oxidative stress
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/7/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>喫煙が大きな健康上の問題であり、心血管系疾患の罹患率や死亡率に関与している。しかし、直接的な喫煙量とリスクの関係については議論されているとおりである。喫煙による有害因子と心血管系に関与する機序との関係は明らかにされていないが、喫煙が炎症、血栓、酸化LDLコレステロールを増加させることは明らかになりつつあり、酸化ストレスが心血管系障害の潜在的な機序である基礎および臨床試験が示されている。</p> <p>すなわち、酸化ストレスによって内皮障害を介し血管機能不全、血小板や凝固線溶系障害、炎症が生じ、さらに遺伝的素因や他の危険因子が関与して動脈硬化血栓症の発症や進展が起これると考えられる。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Jha P, Jacob B, Gajalakshmi V, et al.
Title	A nationally representative case-control study of smoking and death in India
和訳タイトル	インドにおける喫煙と死亡に関する全国規模ケースコントロール試験
Journal	N Engl J Med
巻	358
号	11
ページ	1137-1147
年	2008
キーワード	インド、年齢、性別、喫煙量、非喫煙者 India, age, gender, amount of tobacco, nonsmoker
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/7/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・3・4・ <u>5</u> (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】インドにおける全国規模で死亡率への喫煙の影響が明かでなく、それを明らかにすることを目的とした。</p> <p>【方法】対象は、全国から抽出された110万家族から喫煙群女33000人、男41000人、対照群女35000人、男43000人で、死亡に関する危険因子を年齢、教育水準、飲酒で修正して検討した。</p> <p>【結果】30から69歳の喫煙者は、女性で約5%、男性で37%おり、この集団で、喫煙はなんらかの内科的死亡に関して、危険比は、女性で2.0 (99%信頼区間(CI), 1.8-2.3)、男性1.7 (99%CI, 1.6-1.8)であった。少量の喫煙量でも死亡率増加に関係していた。主に、結核、呼吸器性、血管性、腫瘍性疾患による死亡が多かった。生存中央値は女性で8年、男性で6年短かった。この因果関係が主なものであれば、この年齢間で、女性では20人のうち1人、男性では5人に1人が喫煙に関連した死亡になる。</p> <p>【結語】喫煙はインドの早期死亡を多く引き起こし、かつ増加させる要因である。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Ayanian JZ, Cleary PD.
Title	Perceived risks of heart disease and cancer among cigarette smokers
和訳タイトル	喫煙者の心臓病と癌の危険性の認知度
Journal	JAMA
巻	281
号	11
ページ	1019-1021
年	1999
キーワード	危険因子、心筋梗塞、禁煙 Risk factor, myocardial infarction, smoking cessation
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/7/2009
重要度 (アカデミック)	1・ <u>2</u> ・3・4・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】 喫煙は心血管系疾患や癌による死亡を予防しうる危険因子であるが、喫煙者は自分の危険性を認知していない。従って、喫煙者の心臓病や癌への危険性に対する認知度を調査した。</p> <p>【対象・方法】 米国で1995年に電話と個人による調査を行い、対象は25-74歳の成人3031人で、うち737人(24.3%)が喫煙者。喫煙者における危険性の認知度を地域性や臨床的因子によりロジスティック回帰分析した。【結果】 現喫煙者は、心筋梗塞と癌の危険度が平均以上であることを認識しているのは、各々わずか29%、40%で、重度喫煙者(40本/日以上)では、各々わずか39%、49%であった。高血圧、狭心症、あるいは心筋梗塞の家族歴のある喫煙者でさえ、心筋梗塞の危険性が平均より高いことを認識しているのは各々48%、49%、39%であった。多変量解析の結果、高齢(65歳以上)、学歴(高校卒業未満)、軽度喫煙者(1-19本/日)は認知度がそうでない人に比して低かった。</p> <p>【結語】 多くの喫煙者が自分の心臓病や癌の危険性が高いことを認識しておらず、禁煙に関してこのことを考慮するべきである。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Joe SH, Suh I, Kim IS, Appelk LJ.
Title	Smoking and atherosclerotic cardiovascular disease in men with low levels of serum cholesterol The Korea medical insurance corporation study
和訳タイトル	血清コレステロール低値である男性における喫煙と動脈硬化性心血管疾患
Journal	JAMA
巻	282
号	22
ページ	2149-2155
年	1999
キーワード	Ischemic heart disease, cerebrovascular disease, risk factor. 虚血性心疾患、脳血管疾患、危険因子.
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/10/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・3・4・ <u>5</u> (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】 東アジアは喫煙率が高く虚血性心疾患(IHD)が急増している。しかし、喫煙が動脈硬化性心血管疾患(ASCVD)の独立した規定因子であるかどうか、また、コレステロール(C)との相互作用も明らかでない。そこで、C低値の男性患者を対象として検討した。 【方法】 前向きコホート研究。対象は35-59歳の男性で、韓国医療保険組合健康保険被験者1106745例。IHDと脳血管疾患(CVD)、ASCVDによる入院および死亡を調べた。 【結果】 現喫煙者および総C値200mg/dL未満は各々全体の58%、60%。1993-1998年の間に、1006 IHD 事故(176/100000人年)、1364 CVD 事故(238/100000人年)、716 他のASCVD 事故(125/100000人年)が発症。多変量解析の結果、現喫煙のIHD、CVD、総ASCVD 相対危険比は、各々2.2、1.6、1.6であり、各々において喫煙量および期間と有意な関連があった。また、C値と喫煙の相互作用は認めなかった。 【結語】 韓国において、喫煙はIHD、CVD、ASCVDの主要な独立規定因子で、C低値であったも同様であった。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Prescott E, Hippe M, Schnohr P, Hein HO, Vestbo J.
Title	Smoking and risk of myocardial infarction in women and men: longitudinal population study
和訳タイトル	女性と男性における喫煙と心筋梗塞リスク：一般市民を対象として縦断的研究
Journal	BMJ
巻	316
号	
ページ	1043-1047
年	1998
キーワード	Tabacco, sex difference, prospective cohort study タバコ、性差、前向きコホート研究
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/11/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・3・4・ <u>5</u> (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】以前の解析では女性における喫煙のリスクについて過小評価されていた可能性があったが、近年、女性の喫煙者が増加し、適切に評価できる状況にある。そこで、喫煙状況と幾つかの関連因子を考慮にいれて男女別に喫煙と心筋梗塞発症リスクの関係を検討した。 【対象と方法】コペンハーゲンで施行された3つの母集団研究の蓄積データを基に心筋梗塞の経過をみた前向きコホート研究。心筋梗塞による初回入院あるいは死亡を11472例の女性と13191例の男性を対象に平均12.3年間調査した。【結果】非喫煙者に比して、女性の現喫煙者の心筋梗塞の相対危険度は2.24、男性は1.43であり、有意に性別差があった(比1.57(1.25-1.97), <math>P \leq 0.001</math>)。これは、他の危険因子による補正後も同様であった。男女ともに心筋梗塞の相対危険度は喫煙量とともに増加し、吸入する人の方が高かった。【結語】女性は、男性より喫煙による害を受けやすいことが示唆された。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Yusuf S, Hawken S, Ounpuu S, Dans T, Avezum A, Lanan F, McQueen W, Budaj A, Pais P, Varigos J, Lisheng L.
Title	Effect of potentially modifiable risk factors associated with myocardial infarction in 52 countries (the INTERHEART study): case-control study
和訳タイトル	52 カ国において違いが生じる危険因子の心筋梗塞に関連した効果
Journal	Lancet
巻	364
号	
ページ	937-952
年	2004
キーワード	Sex, age, region
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/13/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・4・ <u>5</u> (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・3・4・ <u>5</u> (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】 心血管系疾患の多くは低あるいは中等所得国で発症しているが、危険因子に関する情報は先進国に由来するものである。世界の多くの地域で冠動脈疾患の危険因子がどのような影響を与えているかは明らかにされていない。そこで、これを明らかにするために52カ国で心筋梗塞の国際標準化ケースコントロール試験を行った。【方法】 15152例の心筋梗塞群と14820例の対照群が登録された。喫煙、高血圧あるいは糖尿病の既往、ウエスト/ヒップ比、ダイエットパターン、身体活動度、アルコール消費量、血液アポ蛋白量、心理社会的な因子と心筋梗塞との関係が検討された。【結果 (喫煙に関してのみ)】 喫煙のオッズ比は現喫煙者対非喫煙者で2.87、人口寄与リスクは、現および元喫煙者対非喫煙者で35.7%であった。喫煙本数に従い相加的にリスクは増加し、一日41本以上の喫煙オッズ比は9.16 (99%CI: 6.18-13.58)であった。</p> <p>【結語】 喫煙を含む危険因子は、性別、年齢、地域を問わず有用であり、心筋梗塞早期予防に役立つことが示された。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Tervahauta QM, Nissinen A, Tuomilehto J.
Title	Mortality from all causes and from coronary heart disease related to smoking and changes in smoking during a 35-year follow-up of middle-aged Finnish men.
和訳タイトル	中年フィンランド人の喫煙および喫煙状態変化に関連する総死亡や冠動脈疾患死亡の35年間にわたる経過観察
Journal	Eur Heart J
巻	21
号	19
ページ	1621-1626
年	2000
キーワード	early and late death, current smoker, ex-smoking. 早期および晩期死亡、現喫煙者、元喫煙者
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/7/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】喫煙が高齢者において冠動脈疾患の独立した危険因子ではないことを示した研究もあり、喫煙と冠動脈疾患の関係は統一した見解が得られていない。そこで、喫煙状態による早期および晩期転帰に与える影響を検討する。【対象・方法】1959年に1900-1919年の間に生まれた1711人にフィンランド人を35年間経過観察した。喫煙状態を1959-1989年に標準化された質問票で調査した。現症は1994年末に調査された。【結果】35年間の全死亡リスクは、非喫煙者に比して、現喫煙者では1.62[95%CI 1.40-1.88]で、元喫煙者では1.13[95%CI 0.93-1.36]であった。10年間の死亡率の方が、35年よりも元および元喫煙者で高かった。</p> <p>【結語】喫煙は中年男性の早期(10年)の死亡リスクとなり、禁煙がその死亡率を低下させることが示唆された。</p>

論文のタイプ	原著
Author	van Domburg RT, Meeter K, van Berkel FM, Veldkamp RF, van Herwerden LA, Bogers JJC.
Title	Smoking cessation reduces mortality after coronary artery bypass surgery: A 20-year follow-up study
和訳タイトル	禁煙は冠動脈バイパス術後の死亡率を減少させる：20年間観察研究
Journal	J Am Coll Cardiol
巻	36
号	3
ページ	878-883
年	2000
キーワード	Coronary artery bypass surgery, smoking-cessation program 冠動脈バイパス術、禁煙プログラム
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/12/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】喫煙が冠動脈疾患の危険因子であることは確立された事実であるが、冠動脈バイパス術(CABG)後については、喫煙が死亡率に関与するかどうかは十分に解決されていない。そこで、CABG後の禁煙の死亡率への影響を検討することとした。【対象・方法】1971-1980にCABGを受けた1041名のうち喫煙状況を調査できた985例を対象とした。【結果】経過観察期間は中央値が20年(13-26年間)で、術後禁煙は死亡および再度冠動脈再建術率を軽減する独立した規定因子であり、背景因子で補正した結果、喫煙の総死亡および心臓死に対する相対危険度は、術後少なくとも1年間禁煙している患者に比して、各々1.68[95%信頼区間1.33-2.13]、1.75[95%信頼区間1.30-2.37]であった。禁煙による生存率改善度は5年で3%、15年で14%であった。CABGや冠動脈形成術の再施行に関しても相対危険度は1.41[95%信頼区間1.02-1.94]であった。【結語】CABG後の禁煙は、予後改善のためにも推奨されるべきであることが示唆された。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Hasdai D, Garratt KN, Grill DE, Lerman A, Holme DR.
Title	Effect of smoking status on the long-term outcome after successful percutaneous coronary revascularization
和訳タイトル	経皮的冠動脈再建術成功後の長期予後に喫煙状態が及ぼす影響
Journal	N Engl J Med
巻	336
号	11
ページ	755-761
年	1997
キーワード	Coronary heart disease, mortality, angioplasty 冠動脈心疾患、死亡率、形成術
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/13/2009
重要度 (アカデミック)	1・ <u>2</u> ・3・4・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】喫煙が冠動脈疾患の危険因子であることは良く知られているが、経皮的冠動脈再建術の予後にどのような影響を与えるかについては、不明である。本研究の目的はこれを明らかにすること。【対象・方法】1979-1995年の間メイヨークリニックで、経皮的冠動脈再建術をうけた患者を対象として、非喫煙者 (n=2009)、元喫煙者(術前に禁煙、n=2259)、禁煙者 (n=435)、継続喫煙者 (n=734) に分け、心事故を検討した。【結果】最大経過観察期間 16年 (平均 4.5年) であった。背景因子で補正後、継続喫煙者は非喫煙者に対して相対危険度は死亡、1.76[95%信頼区間 1.37-2.26]、Q波梗塞 2.08[95%信頼区間 1.16-3.72]であった。継続喫煙者は、禁煙者よりも死亡の相対危険度は高かった (1.44[95%信頼区間 1.02-2.11])。【結語】禁煙は死亡に関しては有用であり推奨されるべきである。(注：本試験では、禁煙者および継続喫煙者は、非喫煙者よりも再経皮的冠動脈再建術施行は少なく、バイパス術施行率も少なかったが、その適応についても基準がなく、これを評価するには注意を要する。)</p>

論文のタイプ	原著
Author	Suskin N, Sheth T, Negassa A, Yusuf S
Title	Relationship of current and past smoking to mortality and morbidity in patients with left ventricular dysfunction
和訳タイトル	左室機能障害患者における現および元喫煙と死亡率と罹患率との関係
Journal	J Am Coll Cardiol
巻	37
号	6
ページ	1677-1682
年	2001
キーワード	Smoking status, left ventricular ejection fraction, outcome 喫煙状況、左室駆出率、転帰
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/13/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】喫煙が冠動脈疾患の危険因子であることは広く知られているが、左室機能低下例で喫煙の影響を検討した報告は少なく、本研究はこれを目的とした。【対象・方法】the Study of left ventricular dysfunction (SOLVD) prevention 試験と intervention 試験の登録者のうち喫煙状況と転帰についてデータが得られた 6704 例を対象とした。評価項目は、死亡、心不全入院、心筋梗塞であった。【結果】現喫煙者が 1562 例、禁煙歴 2 年以下が 1317 例、2 年を超えているのが、2354 例、非喫煙者は 1471 例であった。年齢、左室駆出率、人種、心不全の原因で補正した結果、現喫煙は元喫煙者および非喫煙者に比して有意に全死亡に関連し(相対危険度 1.41[95%信頼区間 1.25-1.58], p&lt;0.001)、死亡、入院を要する心不全再発あるいは心筋梗塞にも関連していた(相対危険度 1.39[95%信頼区間 1.26-1.52], p&lt;0.001)。元喫煙と非喫煙との間では差がなかった。この結果は、両試験別々の解析でも同様であった。【結語】喫煙は左心機能低下例において罹患率(心不全再発と心筋梗塞)と死亡率に関する強力な独立規定因子であった。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Goldenberg I, Jonas M, Tenenbaum A, Boyko V, Matetzky S, Shotan A, Behar S, Reicher-Reiss H for the Bezafibrate Infarction Prevention Study Group
Title	Current smoking, smoking cessation, and the risk of sudden cardiac death in patients with coronary artery disease
和訳タイトル	冠動脈疾患患者における喫煙、禁煙および心臓突然死リスク
Journal	Arch Intern Med
巻	163
号	
ページ	2301-2305
年	2003
キーワード	Cigarette smoking, smoking cessation, sudden cardiac death, 喫煙、禁煙、心臓突然死
読んだ人	佐藤直樹
読んだ期日	3/13/2009
重要度 (アカデミック)	1・2・3・ <u>4</u> ・5 (5点がとても重要)
重要度 (啓蒙的)	1・2・ <u>3</u> ・4・5 (5点がとても重要)
抄録	<p>【背景・目的】喫煙が心臓突然死の危険因子であることは知られているが、禁煙の効果についてはいまだに議論されている。そこで、すでに冠動脈疾患を有する患者における喫煙の影響を検討した。【対象・方法】Bezafibrate 心筋梗塞予防研究に登録された冠動脈疾患を有する患者 3122 名を対象として、前向きに平均で 8.2 年間経過観察した。主要評価項目は、喫煙状態による心臓突然死の頻度とした。【結果】現喫煙者 370 名のうち、30 名 (8.1%) に、1821 名の禁煙者では 83 名 (4.6%)、非喫煙者 931 名では 43 名 (4.6%) に心臓突然死が起こった。多変量解析の結果、喫煙は心臓突然死に有意に関連があり、ハザード比は 2.47 [95%信頼区間 1.46-4.19] であった。禁煙は非喫煙者と同様であった (ハザード比 1.06 [95%信頼区間, 0.70-1.62]。【結語】喫煙は、心臓突然死に独立した規定因子であり、禁煙はそのリスクを低下させ、非喫煙者と同様であることが示された。</p>

論文のタイプ	原著
Author	Santo-Tomas, M, Lopez-Jimenez, F, Machado, H, et al.
Title	Effect of cigar smoking on endothelium-dependent brachial artery dilation in healthy young adults. -
和訳タイトル	葉巻が健康若年成人における内皮依存性上腕動脈拡張反応に及ぼす効果
Journal	Am Heart J
巻	143
号	1
ページ	83-86
年	2002
キーワード	cigar smoking, endothelial function, vasodilation, young adults 葉巻喫煙、内皮機能、血管拡張、若年成人
読んだ人	宮武佳子
読んだ期日	2009.2. 28
重要度 (アカデミック)	3
重要度 (啓蒙的)	3
抄録	紙巻たばこの喫煙者数は減少しているが、葉巻は、とくに未成年者や女性、若年成人の間で増えている。葉巻が健康な非喫煙若年成人に及ぼす内皮機能へ及ぼす影響を研究。平均年齢 31 歳、29 名の健常者を葉巻喫煙群 15 名、対照群 14 名に分け、超音波で上腕動脈径を安静時と駆血解除および N 舌下後の変化率を調査。前値は、両群とも同様(6.2% vs 6.7%, P=0.4 and 22% 対 23%, P=0.5,)、喫煙 1 時間後の駆血解除後の変化率は喫煙群 2.5%、対照群は 9.4%, P=0.045、N 舌下後は両群とも 23%対 20%と違いはなかった。一方、喫煙 5 時間後では喫煙群 12 名、対照群 9 名の結果では、駆血解除後の変化率には両群間での有意差はなかった。この結果は、葉巻が内皮依存性血流依存性上腕動脈径の拡張を障害する急性効果を有し、内皮非依存性血管拡張には影響しないことを示唆し、これらの結果は葉巻が紙巻たばこに代わる無害なものではないことを示唆するものである。